

で対応するので必要としないという意見もある。

- (3) 初期補正剤は少量でよいが、既存の剤を1/2～2/3散布するとムラが生じ易いので、有効成分量を下げて3kg/10a散布できるような補正処理専用剤も必要と考えられる。(古川農試)
- (4) より安価な供給(3,000円/10a以内)
- (5) 湛水直播栽培用の長期持続型一発処理剤の開発(南東北)

(6) 活着期追肥用の肥料に配合した一発処理剤の開発または現地混合技術の開発

(7) コーティング等により溶出速度を一定にした一発処理剤の開発

その他、特に一発処理剤に限った問題ではないが、漏水田、大型水田、田越しかんがい田などで水による移動が少ない剤、気象条件の影響を受けにくい剤、さらには水稻や水生動物に対してより安全な剤の開発、改良を望んでいる。

□ 有機農法等に思うこと □

いわゆる有機農法や自然農法などの共通点は化学肥料や農薬をほとんど使用しないことなのである。そして、マスコミ等が派手な取り上げ方をするので、一般農産物はあたかも健康を損うような誤解さえもたせかねない状況でもある。日植調の吉田常務は本誌最近号(21巻12号)の巻頭言において普通に農薬を使用して生産された米は危険だというムードが意識的に醸成されているようなことがあれば甚だ遺憾であり、一般家庭に正しく認識させるように努めることが大切だと指摘している。

これには全く同感であるが、さらにこれらの農法は概して低収であり、労働費は大幅にかさむので生産物は高く売れなければ採算割れになることを理解してもらう必要がある。極言すれば、これらの農法を普遍化するためには食料の完全な国内自給、徹底した生産者の所得補償という経済の国際化や国内産業間の生産性格差問題を度外視した国是が存在しなければならないのである。

ひるがえって、現在のわが国の農業について

は反省すべき点もある。例えば、施肥は手取り早い化学肥料に依存して有機物の投入や深耕を怠り、病虫害や雑草の防除もその基本である耕種(生態)的防除を軽視して安易に農薬に頼ることなどである。そこで有機農法等が現在の日本農業に対していくつかの警告を発していることに対して、謙虚に受けとめ、耳をかたむけることが必要である。

現在、経済連や農協が各地で展開している有機米や低農薬米の生産方法は、程度の差はあるが上述の反省点を踏まえた言わば折衷的なもので、ある程度の労働費の増大は避けられないにしても現実性があるように思われる。

ただし、これらの有機米や低農薬米を単なる米の販売戦略としてとらえ、羊頭狗肉のそりを受けるとのならないようにするとともに、現在の農薬は正しく使用する限り安全であることを国民に理解してもらう努力をつづける必要がある。

そのためには安全基準を厳守して、農薬を使用することが極めて必要である。

(高橋長二)